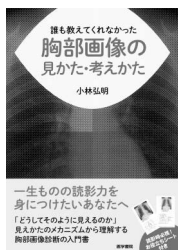


書評

[評者]

芦澤和人

長崎大大学院教授・臨床腫瘍学



誰も教えてくれなかった

胸部画像の見かた・考えかた

小林弘明 著

●B5 頁266 2017年10月

定価：本体5,000円＋税

[ISBN978-4-260-03008-3]医学書院刊

小林弘明先生のご執筆による胸部画像診断の入門書『誰も教えてくれなかった胸部画像の見かた・考えかた』が刊行された。胸部単純X線写真に関する数多くの教科書が存在するが、本書はこれまでの他書とは異なる視点で記載されている。すなわち「画像の見えかたのメカニズム」から考える読影法が紹介されている。どうしてその陰影・線が見えるのか、反対に見えないかを解説しながら、陰影・線の写り方、見かたを習得し、1枚の画像からより多くの情報を取り出すことを目標としている。

その目標を達成するために、本書には多くの工夫がなされている。まず、Introductionのところでは、本書で使用されている最低限押さえておきたい画像ないしシェーマが紹介されており、特に重要なものは付録の「読影時必携！お役立ちシート」に掲載され、実際の画像を読影する際に有用である。CTの横断像やMPR画像が適切に配置されており、読者が胸部単純X線写真上の「陰影や線の成り立ちを考える」ことを容易にしている。また、さまざまな知識の習得と整理を目的として、たくさんのコラムが散りばめられている。本書には極めて多数の手術写真や病理標本、細胞診、組織像が掲載されているが、これらは、ほぼ全てが著者によって撮影されたものである。呼吸器外科医でありな

がら、画像診断から病理診断までを一人で手がけてこられた著者だからこそなし得た偉業であり、著者の豊富な知識と経験に基づいた完成度の高い専門書である。

本書は15章で構成されているが、いずれも興味あるタイトルが付けられている。胸部単純X線写真や胸部CTの撮像原理などの基礎知識に始まり、正常画像解剖や正常変異、線状影やすりガラス影、無気肺などの異常影について豊富なシェーマを交えてわかりやすく解説されている。肺癌では、読影のピットフォールや新しいTNM分類にまで言及されており、さらに胸膜や縦隔病変、実臨床での胸部単純X線写真の活用法が紹介されている。かなりのボリュームで力作であるが、通読して頂ければ、著者の意図する到達目標に達することが可能である。

胸部領域の画像診断においてもCTは不可欠な検査法となったが、安価で簡便な胸部X線撮影が第一選択の検査法であり、その重要性は今後も変わらないと思われる。胸部単純X線写真の読影能力を高めるためには、CT所見を単純X線写真にフィードバックする作業が極めて重要である。胸部単純X線写真の読影に当たる若手の医師だけでなく、呼吸器疾患の診療に携わる専門医も含めて、CT画像が多く提示された本書を必読されることを期待する。